

和田傳

和田傳全集 第10卷

定價 2,800 円

昭和五十四年一月十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

(〒 162)

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 家 の 光 協 会
法 人

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 | 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社

製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第十卷

和田傳全集（第十卷）目次

船津傳次平

5

流域

173

祖父と祖母

312

貧乏酒

333

醬油

354

解説

赤星虎次郎

付・年譜

装幀
舟橋菊男

題字
久住和代

船津傳次平

—

赤城風は四月になつてもまだ冷たい。

月はなかつたが降るような星月夜で、風が吹いて渡るたびに星々はちかちかと瞬き、さすがにその光にはもう春の色があつた。

鍋割を真ん中に、荒山、鈴ヶ岳、地藏、長七郎など赤城の嶺々はくつきりと夜空に浮かび、その裾野は長く、長く、刷毛で刷いたように地平線をかきついている。奥の武尊の嶺々はまだ雪をかぶり、吹きまくる風の冷たさはその姿からもひとしお感じられるのだ。

その風をまともから受け、南麓の裾野の村を指して行く市蔵はしかし汗をかいていた。振り分けにした大きな行李と大風呂敷の包みは、十九歳の逞しい肩にも重かつた。前橋まで平坦であつた道は、そこを過ぎるとしだいに爪先上がりになり、裾野にかかるのだ。汗をかきながら市蔵はぐいぐいと大股に歩いて行く。正面の赤城を仰ぎ、左手の榛名の嶺々を、その間に低く連なっている子持の山々を眺め、これらの山々に三方を取り囲まれ、東に関東平野を一望に見下ろす家郷、原之郷村を、彼はなつかしい思いで眺めやりながら益々足を速めた。

あすからはまた野良着を着よう。麦も伸びたようだ。桑の芽もやがてほぐれるだろう。田の畔も塗ろう。里芋は植えたか知ら？　まだかも知れぬ。……そうだ。家に帰ったら長芋を掘って、とろろ汁が腹いっぱい食いたいのだ。……市蔵はにやにやしながらそんなことを考え、何を見、何を考えても足が急ぐのだ。

正月のはじめこの通りの姿をして家を出てから四カ月振りの帰郷である。その間に二、三度里芋と馬鈴薯の試験植えに飛んで帰ったことはあったが、いずれも日帰りではしかなかった。……板井村で数学に打ち込んで暮らしたように、これからは暫く学問は封じ、暗いから暗いまで泥に塗れる生活に打ち込むのである。市蔵はわくわく心を悸かしている。学問のことを考えてもわくわくし、百姓仕事のことを考えてもわくわくする。どうしてお前はそういうものが好きなんだ？　少しくらい嫌いなものがあるてもよからうにと、父親もよくそう言って笑ったし、板井村の師匠も同じことを言ったが、市蔵自身われながらそのわくわくしてかぶりついてゆく性癖に気づいておかしくなる時があった。しかし、いまはそうではない。紐から解いて放たれた蛙が田に飛び込むような氣勢で彼は帰路を急いで行く。

小満しよまん（太陽暦五月二十一日頃にあたる）にはまだ日がある。早目にきりあげて帰って来たことを父親は喜ぶにちがいない。……きょう、あれほど早目にきりあげることが惜しく、師匠の斎藤長平に別れを告げる時は涙さえこぼれ、板井村から前橋まで二里の道は後ろ髪を引かれる思いで歩いたのに、前橋の町に着いてひとたび赤城の南麓を見上げるとこの有様である。そう言えば板井へ出て行く時も丁度これと同じ気持ちでこの逆を行ったのだと彼は思い出し、道のりまで前橋を中に南北それぞれ二里ずつであるのもおかしかった。

平野から裾野にかかる最初のだから坂をのぼりきった上に、ゆるい斜面を起こして丘陵がうねり、原之郷村はそこに南を向いて藁屋根を聚めている。二、三軒若しくは四、五軒ずつ茸のようにかたまりながら、播き渡ら

れたように散らばっている。

市蔵の家はそのなかでも大きな家だ。門を入った右手に土蔵が一棟、それと向かい合って南向きに蘆葺きの大きな母屋が立っている。トボ口からひろい土間に入ると、四里の道を載せて来た振り分けの荷物はかたく肩の肉にくいこんでいるようで、それを櫂の一枚木の上がり段に下ろす時は肉が剝がれる思いがした。

土間の右の隅の厩舎では、馬はまだ寝ず、暗闇のなかで首を二、三度振った。

——おう、釈迦、まだ起きてたか？……また一緒に野良へ行くべえのう。

と、口には出さず愛撫をこめて市蔵は囁いた。四月八日に生まれたその愛馬にそう命名したのも彼であった。十七畳半の大座敷には誰も見えない。隅には真ッ黒によごれた経机が、たくさん積み重ねてある。だいが弟子どもが増えていることがその机の数でわかった。……父親傳次平は寺子屋師匠をしており、その大座敷が昼の間は寺子屋になるのであった。母たちは大囲炉の端で市蔵が帰ったのを見たが、彼は真ッ直に父親の部屋へ向かって大座敷を横切って行った。奥に八畳が二部屋ならび、その南の端に四畳の書院があり、そこが傳次平の書齋であった。

——市蔵只今戻りやした。

彼は敷居の上に両手を突き、なつかしく父親の顔を見上げた。

——おう、早かったのう。

傳次平は書き物の筆をおき、上体をよじって振り向きながらじろりと市蔵を見据えたが、笑い顔も見せぬかわりには、眼に愛撫のいろがあった。

——お師匠さんは達者か？

——はい、御達者でがした。

——どうだ？ 小侯よりも面白かろう？ ……板井の師匠は豪いだらう？ ……。

前年、市蔵は下野しもつけの足利郡小侯村の師匠大川茂八郎に就いて最上流の算術を学んだのであった。小侯は原之郷から十一里、市蔵はその道をやはりいまのように振り分けの荷を肩に草鞋を穿いて弟子入りをし、やはり小満近くになってから帰って来たのであった。

——板井では何を習って来た？

——点竄てんざん円理を習いはじめました。

——面白いか？

——面白くて、考え出すと夜も眠れませんが、お師匠さんに叱られてばかりいやした。

——道は開きあそうか？

——開くとは思いやすが……むずかしいと思ったことはそんなになかったですが。解けない問題にもあまり出会わなかったですが……。

傳次平は唇だけで少し笑い、机の書き物の上に眼を戻した。……板井の師匠齋藤長平からは二、三度彼にたよりがあり、それらはいつも市蔵の数理に長けた頭脳に驚嘆する文字で埋まっていたのである。数多い弟子中随一の頭脳であり、恐らく再来年の小満までには、関流の皆伝を授けられるにちがいないと、最近のたよりで長平は言っていた。

しかし、傳次平は市蔵にはおくびにもそんなことは言わなかった。少しでもそのような気色があらわれることを恐れて、彼は机の書き物の方に眼を戻したのだ。

——よしよし、小満までにはまだ日がある。夜分はつづけて学問をするがよからう。

——いえ、あしたから書物は封じるでがす。……野良へ出たくてむずむずしておりやすので……。

市蔵はそう言っではじめて笑った。

——それもいいだろ。

傳次平も合わせるように笑い、また市蔵に向き直った。

市蔵は風呂敷包みのなかから、半紙四ツ折りの小さな帳面を取り出して傳次平の前に差し出した。それは板井在塾中の小遣い帳で、几帳面な市蔵は、文久一文の付け落ちもなく記帳して父親に差し出す習慣である。

——腹が空いてるだろう。かき餅でも焼いて食え。

傳次平はそれからまた書き物の方へ向き直った。

彼は読み書き手習いの師匠のほか、俳諧をたのしみ、自ら号して白庵と呼び、俳名を午麦と言ひ、晴耕雨読の生活を悠々とたのしむと言った日常であったが、算数の頭脳はべつになく、またあまり強健でもなかったので、農事に篤いというほどでもなかった。しかし、子弟の教育には厳格をきわめ、寸毫も仮借するところなく、とくに市蔵がずば抜けた算数の頭脳と、百姓熱心と強健な身体とにめぐまれていることを見抜いてからは、内心それを待みながらも一層の峻厳さでそれにのぞんでいたのである。

「稽古事は冬春の両期に於いてなせ。書物は小満より白露はくろ（九月七日頃）の候までは封じ置くべし。暑中は実業一途に勉勵せよ。」

彼はこのことをもって船津家の家憲とし、市蔵にはきつく言い渡してあった。

また、

「金貸しと商法とは為すべからず。その他終わりの疑わしき事は決して着手すべからず。田畑を多く所有すべからず。又多く作るべからず。農業は雇い人二名、馬一頭にて営み得る位を度とすべし。」

とも教え、それもまた家憲として市蔵には申し渡してある。

挨拶を終え、大囲炉のところへ戻った市蔵は、もはや書院でのような言葉はつかわなかった。

——お母さん、かき餅が食いたくての、おら、板井では夢にまで見たや。

母親がもう焼いておいてくれたかき餅をがりがり音をたてて食べながら、

——うめえのう、同じ餅でもよその餅はどうしてあままずいんだべな？……餅らしい餅をよそじゃ食ったことがねえよ。

——飯の方はどうだい？ 板井の飯は少しはうまくなったかや？

——うまくなったよ。……だが、いくら講釈しても駄目だから、おれが自分で炊くんだよ。おれに炊かしてくれとお師匠さんにも願って炊いてるだ。皆さんもそれじゃ大喜びだよ。何しろえらくうめえ飯を炊くからなあ。天下一品だとお師匠さんも褒めてなさるだ。

——飯はうめえし、薪もいらなくて大喜びだろのう。

若い男のくせに市蔵は飯を炊かしても誰よりもうまく、火を燃させても誰よりも薪をつかわぬのであった。そんなくらいだから味覚も発達し、やかましいことを言って時に母親を困らせるのである。しかし、困らせるのが能でなく、彼は苦心し研究し、必ずその欠陥を見つけ出し、やり方をあらためさせるのであった。

例えば飯炊きの水加減にしても、目分量や手加減ということを斥け、一升の米に対してなら水は一升二合という風に、必ず数字的にはっきりとつきとめなければ満足しなかったが、それも教理を好むところから来っていた。

——おれもいろいろにやって見たけど、飯の味をうまくするには、白米を磨いで飯に炊くまでの時間をできるだけ短くすることだのう。そうすると飯粒もあまり膨れねえし、甘味があつてうまい飯になるだ。前の晩に磨いでおくとうめえなどは真ッ赤なうそだよ。……だけれど、前の晩に磨いでおいた飯は、饅すえることだけは遅いようだのう。

——そうかのう。じゃあ夏にはその方がいいだな。

と、母親はそうなるとたじたじで、いつの間にか教えられる側になるのだ。

——一升の米を飯に炊くには、二十分以上かけちゃ駄目だな。そいつを誰も三十分以上かけて薪をよけいつかうだ。飯粒は膨らまして薙刀形にしゃがるし、折角の甘味をなくしちゃうんだ。だから冷飯になると殊さらまずく、お湯をかけて攪かきまわすと濁り汁のようになる。……そんなことじゃあ米が泣かあな。……おれももう少し研究してからでねえと人に教えられねえがの、何だなあおッ母さん、農家ではまずこの飯炊き法からあらためてゆかなきゃならねえのう。

喋り出すと油をさされたみたいに舌が廻り、殆んど果てしなくなるといのが市蔵の癖であった。あれほど食いたい食いたいで驚掴おみにしたかき餅にも、忘れてしまったみたいに手が伸びない。

——薪の方だつて、おらの方法でやると、一升の飯を炊くに、薪百五十匁の経済になるッてことをつきとめたよ。薪百五十匁だつて買えば二厘ほどになるんだからのう、一年中じゃでかいことにならあな。

——ふーん……。

母親も内心この長男のふしぎな才能には一目おいていたのであった。

——まあ、あしたからは飯はおらが炊く。もう少し研究をしてからでねえと人様にゃ教えられねえ。……とこ

ろが、あしたはおら長芋を掘るからなあ、晩には麦飯を炊いてとろろ汁が食いてえがどうだんべかな？

——そりゃあいいともさ。お父ツァンはこの冬は俳句に少し身が入り過ぎたようで、まだ長芋掘りもしなさらなかつただよ。とろろ汁はいいのう。

かき餅は次々と焼けるのに市蔵が手を出さぬので、皿に盛りこぼれるほどになっていた。市蔵はやっとそれに気づき、両手でもって摘まみとり、再び、うまいうまいと言いながら頬張り出した。

土間の向こうの厩舎では、釈迦ももう眠ったようである。屋敷の檜の木がからッ風に唸っている。——嘉永三年の春であった。

二

市蔵は自家の雑木山のなかで自然薯掘りだ。しかし、その自然薯は一向自然薯らしくもなく、まるで畑につくった長芋を掘るようにわけなく掘り出されてしまうのであった。芋には疵一つつかず、まして折れたりするやつはただの一本もなかつた。

何しろ雑木林のなかの自然薯のことだから、木の根が張りめぐらされていて、芋はその根の間を縫って深く土中に入っている。その木の根竹の根を切りながら、この折れやすいやつを掘り出すことは容易なわざではないのだ。それを畑の人参でも抜くように市蔵は掘り出しているのであった。

——市蔵さん、お前はまたどうしてそう上手に掘るんだや？……どうも魂消たな。

と、呆れかえったように眼を瞠って近づいて来たのは近所の年寄り、八右衛門であった。

丁度市蔵が三尺ほどある自然薯を疵一つつけず楽々と掘り出したところであった。

振り向いて市蔵は馬のように長い顔でえへらえへら笑っている。

——どうしてお前そう上手にやるんだ？ お前と来たらどうしてまた……。

八右衛門は眼を瞠って市蔵の手にしている突き鑿を吟味した。しかし、それに何の仕掛けはなく、ただの突き鑿でしかない。

——芋の方で掘ってくんろ、くんろとおらの方へ靡いて来るんさ。べつに種も仕掛けもねえよ。

——馬鹿言えや、そんな子供だまはやめろ……。

八右衛門は本気である。

——何が子供だましなもんか。そんなら八右衛門さん、おらと一緒に来て見ろや。

——おう、行くべとも……。

そこで市蔵はそこから少し林を分けて入り、とある櫟の木のところの芋の前にとどかりと腰を下ろし、両足を投げ出した。

櫟の株は太く、その近くには竹も繁っている。

——さあ見てろや、こいつをおらが掘って見るからの。……ちやんと、芋の方でおら方に靡いて来るわな。

おらの言うことはよくきくよ。

まじめくさって笑いもせず市蔵は言い、突き鑿で掘ってゆく。八右衛門は騙されるものかと眼を瞠り、その突き鑿のうごきを覗き込んでこれも生真面目である。

やがて自然薯のあたまがあらわれた。突き鑿は活潑にうごき、芋は見る間にその上部をあらわしてくる。言うまでもなく薯は垂直に下へ伸びている筈である。櫟の根元なので、木の根がそれとはすかいに横に張っている筈

である。その根もしだいに見えてくる。

八右衛門は瞬きひとつしないで見つめている。ところが、市蔵の突き鑿は、やがて垂直に掘ることをやめて、斜めに、手前へ手前へと掘ってくる。自然薯は下へ垂直に伸びてはいないで、何ということだ！ これもやはり木の根のように、斜めに、伸びていたのである。

木の根と同じように、しかも木の根の張っているところは避け、斜めに、丁度四十五度ほどの角度で、市蔵の手前の方に伸びてきているのだ。木の根一つそれを遮っていない。市蔵は鼻唄をうたいながら、苦もなく、三尺もある長い芋を掘り出してしまった。

——ヤッ、とんでもねえ芋だなや、こいつは！ 下へ伸びねえで横へ伸びてるじゃあねえかや！……何としたことだ！ 市ッちゃん、こりゃあ何としたことだよ？

呆れたように、八右衛門は眼を瞪り、それは唸るような声になって出た。

しかし、八右衛門も五十年野良の雨風にたたかれてきた百姓である。

——種も仕掛けもねえとお前は言うが、仕掛けがあるじゃねえか？

——わかったかな？

と、市蔵は大口あいて笑い出した。

が、その仕掛けというのを八右衛門はまだよく見破れないでいた。

——こりゃ何としたことだよ市ッちゃん？ お前どう仕掛けておいたんだや？……。

——どうもこうもねえさ。ただな、こっちへ芋を呼び出しておいたまでなんだ。木の根が邪魔でうまく掘れねえからなあ。……芋でもおとなしくよく言うことをきくもんだのう。